



【短歌】

楠瀬 兵五郎 選

青柚子の太り具合を見廻れば葉先をすべる露にぬれゆく  
 安芸城址濠の蓮の茂り立ち真白き花をかかげてゐたり  
 「メタボリック」克服せむと歩む道老驚頻りにガンバレと啼く  
 娘ら止めるを聞かずにフリーダイヤルし吾に珍しドラゴンフルーツ  
 咲き残るサツキの花に声かけて今年は少し早めの剪定  
 ことごとく変形したる足の指丹念に吾が洗い終えしとき  
 体調のすぐれぬ時はひしひしと黄泉の国への一人旅思ふ  
 どくだみに柿に枇杷の葉諸諸を合はせ信じて飲む薬草茶  
 草莽の志士の生家はまだ奥とホトトギス啼く峽を行きゆく  
 同窓の集いがあると文とどき思い出しいる友の顔顔  
 艶やかに茄子のむらさき陽に映えて心ほの畠より帰る  
 白馬大池に下る坂道カラカラとカップもはしゃいだ二人の背に  
 氷河より流るる水を口に含む無限に白き山肌に立ちて  
 紅淡く色美しき紫陽花の枝を切られて萎まむ姿  
 雲海空碧く富士の姿あり背に飛行雲まこと神秘に  
 アキアカネ群れ飛ぶ野良に来て立てば遙かなる父の背の懐かしき  
 山里の夏草の中にひっそりと品良く白き螢袋の花  
 身体の自由もきかぬリウマチをわすれ鎌うつ荒れし里山  
 亡き祖母の齢となりぬ何事もあやかりにつつ我は生きをり  
 鯉節と昆布の匂うこの街角朝の挨拶かわし過ぎゆく  
 真裸で被く土なき石の上に分葱は萌ゆるいのちひたすら  
 ファミリアの買い物ツアーに参加するサニークシス広き店内  
 小雀は芝生の中の虫を取るそのしくさただわれは見とれて

公文 正子  
 高橋 章  
 門田 明子  
 北村佐喜子  
 出原 久子  
 法光院俊子  
 大石 千冬  
 大石よし子  
 竹内 市郎  
 武内 菅恵  
 公文 千恵  
 吉本 悦子  
 武内 弘子  
 小野寺朱実  
 高野 和一  
 山崎 貴子  
 山崎みどり  
 鍵山 みつ  
 門田 喜美  
 大久保 操  
 大岸由起子  
 竹村 松子  
 和田 利衛

夏芽立つ青木の茂り刈らむとし暮れに転けたる夫又あがる  
 リウマチの痛みは止まぬ九十才重ねて生きむ春風は吹く  
 曾孫の路に乗り回す一輪車夏の日差しに輝きており  
 一鉢のブルーベリーの今年の実待ちまちしもの掌に二三つ  
 遠き日にみ墓にぎざみし母の歌苔を落して沁みじみと読む  
 久びさの芝居なつかし若衆の粋な着流しまだまなうらに  
 赤くなる掌くらべて亦樂し祝賀の席に手拍子とれば  
 白波の立ちて渦巻くその潮に棒切れたちまち吸い込まれたり  
 朝霧に朝光さして青き花子供らと共に信号を待つ  
 明日こそバラ色の日々と歩み来て五十年過ぎあとは何色  
 施設の妻訪ふ日々も早や五年一人暮らして叔父はすこやか  
 声かければ高き声あげ顔見せし頃と同じきわが友の窓  
 頼むべき次の世代の子の名前立ちつつ告げる父母の前  
 四時間の高速バスに着きし神戸人波のなかエトランゼわれは  
 夏ツバキ白きひとへの花に降る雨の止まざる庭の夕暮れ  
 ぐいぐいと乳を飲む子のまなざしはただ一点を見るともいへず  
 道の辺に拾ひしいとけなきアカザ庭に根付きて芯紅に  
 一羽とも二羽とも夜明けをクーククウクと鳴くその含みこゑ  
 アンパンマン立体和紙で作ろうと吾も勢える子らの計画  
 おどおどと待機する日を悲しめど山の遙かに湧く雲しろく  
 夏木立の下に折られしは母の形見白粉花の痛み去来す  
 株分けてもらいし菖蒲咲きはじめ見とれわが居る紫の太き花片  
 三百万食廃棄の日本飢える子等の腫動かぬ映像を見よ  
 休日の息子の百姓つき合いは仕切ってみたりまたなげやりに  
 木の肌の風化少なき御堂なれば五百余年を経しとも思へず  
 癒ゆるなかりし悲しみ知りてこの庭にリョウウブの花と直き花梨と  
 切らるべき運命として立ち揃ふ葎の花に夕陽があたり

岡崎 和枝  
 森安 花恵  
 尾立 かよ  
 横田直加子  
 蓮池 和子  
 森 晶子  
 竹村 稔美  
 秋山 正美  
 古谷 由美  
 大石 信子  
 都築 初代  
 佐々木真里  
 小野川恵仁  
 山下 弓枝  
 田村 房子  
 古川 安子  
 坂上のぶ子  
 三宮のり子  
 宮地 亀好  
 小松もとみ  
 大利佳都香  
 森本真理子  
 山崎かつみ  
 坂本 好  
 岡林 華伝  
 佐竹 玲子  
 楠瀬兵五郎

俳句・短歌の作品は、企画課内・広報委員会事務局へご投稿ください。